

---

ふくふく

滑稽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ふくふく

### 【ZINE】

N0139A

### 【作者名】

滑稽

### 【あらすじ】

放課後の保健室。僕と彼女は出会った

「私ミニマリストになりたいのかもしれないわ。」

### 放課後の保健室。

僕の後ろで彼女はそう洩らした。

保健室には毎日居る僕だけど、彼女とは初めて会った。

僕に言つていいわけでは無く。

ただ感じ、思つたままに口を開いた。そんな風。

僕は返答など求めていない彼女に言葉を渡した。

「

「

それから毎日彼女は放課後、保健室に来る。

だけど僕達に会話などなかつた。

ただ彼女は僕を見つめていた。

何かを求めているように。切なげに。嬉しそうに。

けれど僕は知らない振り。振り振り振り振り

ある日。彼女は思い詰めた顔をして保健室にやつて來た。手には…  
…カッターを持ち。

最悪の場合に備えて、僕は彼女から距離を取ろうと試みた。

だけれど此処は閉じられた場所。

僕はすぐ壁にぶつかつた。彼女のカッターが視界に入り、僕は口をパクパク

自分を情けないとは感じなかつた。

彼女が怖い。

彼女の顔が恐ろしい。

いや……その両。

眼球が……きょりきょりきょりきょり。

定まらず。きょりきょりきょりきょり。その間僕は彼女から逃げ惑う。

何分くらい、そうしていただろう。

不意に彼女が座り込み。

きょろきょろ動かしている瞳から透明なキラキラの雲を……  
ソレは彼女の白く柔らかそうな頬を辺り、シンと尖っている顎まで  
いくとポトリ。と落ちた

「あたしには貴方しかいないのに……何も話してくれない貴方しかい  
ないのに」

語り出した彼女の瞳からは止まる事を忘れたかのようにポトリ。ポ  
トリと雲が……

彼女はカッターを持つままの右手で制服の左袖をめくった。

「ミミズ……みたいでしょ？」

僕に見えやすいようにか左腕を差し出す。いつの間にか、僕は彼女  
の近くに……

『ミミズ』だ。

彼女の白い肌を染め侵してしまおうとしているかのように幾筋も。  
幾筋も。紅の筋が

「ひつやつ……あたしはミミズを産むの。」

左腕にカッターを押し当て、新たなミミズを産んでいく彼女。

「あたし……どうしてこんな事をするのか分からないの。でも気づいた。

ミミズを産んでいる彼女は顔を上げ微笑んだ。

やつぱり雫を落としながら、きょろきょろ眼球を動かしながら、「あたし//ミズになりたいのよ。いつやって一体になりたいのよ。」

彼女はカッターを床に置き、指で///ミズをなぞる。何度も何度も「ふくつて膨れてる私の左腕。」

僕は彼女を見つめた。

彼女と僕の目が合つ。瞬間、まるで解け合つような感覚。彼女は口を動かす。

『ふくふくふくふく』

僕と彼女が混ざり合つたのよ……

「今日、あたしが産んだミミズ達は数日後には立派なミミズとなるの。」

彼女と一体になりかけの僕に彼女は微笑みながら語る。僕は彼女だけを見つめる。

彼女はまた『ふくふく』と呟いて僕に微笑む。僕はずつとぶくぶくぶくと繰り返す。ぱくぱくぶくぶく。

貴方があたしと初めて会つた時、貴方はあたしにこう言つたわ

『ふくふくふく』

彼女は微笑み。僕に語る。

「先生に聞いたの。貴方が病気に犯されてるって。後何日かの命だつて。」

分かつてた。僕はきっと後何日かで死んでしまうのだつと。

「許さない。」

彼女は天井を鋭く睨み付ける。

「あたしから奪おうとするものを…今まで奪おうとしているものを許さない。」

それがたとえ病だとしてもね。と彼女は天井から僕に視線を移し微笑む。

「あたし達ふくふく仲間よ。あたしは左腕にふくふくのミミズを飼つていて。ふくふくふくふく。」

言いながらまた、ミミズをなぞる。なぞる。

「貴方は……でしょ？」

後数日は大丈夫だと思つてた僕はあんまり自分が永く無いことに気づいた。

きっと彼女も分かつたのだらう。

僕が逝つてしまつ前に全てを伝えようと早口になる。

「だからあたし達ふくふく仲間。仲間。あたしと貴方は仲間。あたしはふくふくのミミズになりたかった。きっとそう。だからあたしの左腕という一部にした。貴方も…………。許さない許さない許さない。仲間なのに、あたし達……。貴方一人で……一部に……。」

いよいよ僕は終わろうとしている。

最後に見たのは彼女が僕に両手を差し伸べている姿。

一人になつた彼女はまたふくふくになろうと、或いは一人ではなく、一つになろうと、放課後の保健室の水槽に両手を入れ、彼を飲み込んだ……ふくふくふくふくふくふく

ふくふく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0139a/>

---

ふくふく

2010年10月28日03時51分発行